また、明日。

山田桜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
また、明日。

【Ｎコード】
Ｎ２１３０Ｕ

【作者名】
山田桜子

【あらすじ】
親離れの為に×○高校に入学。主人公、浅倉明日香のどたばたコメディーかなぁ…？？

一日目（前書き）

浅倉（略浅）「皆さん、初めまして浅倉明日香です」
高柳（略高）「俺は、高柳正平です」
浅「いや…それにしても、前書きに僕らを前に出して何を考えてるんだろうね…作者は？（苦笑）」
高「考えていないんじゃないのかな（苦笑）」
浅「厳しい！！（笑）」
高「そうかなぁ（苦笑）」
浅「まぁ…ここらでお開きにしますか？」
高「…だね（ニコッ）」

一日目

『　ちゃん、いつかボクとけっこんしよう？』

幼い頃の僕は、指輪の代わり四つ葉のクローバーを　ちゃんに渡した。

『うん…良いよ』

ちゃんは花の様にふわりと笑い、僕の頬にキスをした。

『ぜったいだよ？あすか君』

『うん！！』

『『やくそく』』

僕らは誓いのキスの代わりに指切りをした。

……

僕、浅倉明日香は独り暮らしをして１週間目が経つ。
春になれば桜が綺麗なボロッ…１ＬＤＫなアパートに住みはじめた。
両親からの猛烈な反対を押しきって、入りたかった高校…嘘です。
独り暮らしをしたかったために、家から遠い高校を受験し入学した。
もちろん、生活費はバイトをして生活を遣り繰りしていくつもりだか学費は両親が払って貰うことになった。まだまだ、自分が子供なんだと思い知った。
×○高校は共学で、男女の比率はだいたい同じくらいらしい。運動や勉強では平均的で、目立つ人は目立つがそれと言って噂にたつような高校ではないらしい。一応、入学する前に下調べはしたつもりだったが…変な噂は学校内であると、とあるホームページに書いてあった。
あっ…今日から×○高校の学生として生活が始まる。
高鳴る胸を抑えて…冗談です。高鳴るどころか、行く気すら起きない。
「あぁ…面倒臭い」
吐き捨てるように僕は呟いていた。食器を洗い終え、タオルで手を拭きながらハンガーに吊ってある制服を見てまた、学ランかぁと思っている自分に苦笑した。
小中と学ランだったから、高校はブレザーも着てみたいと少なからずあった。
でも、まぁいっかとズボンを脱ぎ始めた。

…それにしても、久し振りに夢を見たなぁと僕は振り返りながら着替えに取り掛かった。
　ちゃん。…名前が全く思い出せない。可愛かったような気がするが、今になっては過去のことだ。気にすることもないだろうと、僕は思いだしかけている記憶を思い出さすことをやめて、やや思い鞄を片手に持ち誰も居ない部屋に僕は、挨拶をして鍵を掛けて出かけた。

ガチャ…。

「あぁ…面倒臭い」
外に出て初っぱなから、行く気がない僕は軽く面倒臭いと呟いていた。元々、学校がそれほど好きでもなかったし行かなきゃという気持ちで行っていただけで、休みの時はたいてい部屋でゴロゴロと寛いでいた。要するに、かなりのインドア派である。
たまに、ダチから遊びに誘いがある時は遊ぶけどそれ以外は家に居る。
僕以外の入学生は胸を踊らせながら通学しているのだろうか？高校デビューとか心機一転気持ちを変えて学校に行ってるのだろうか？正直、俺には逆立ちしてもわかりはしない心情なのには間違いない。
「ふぁッ…あぁ…」
僕は欠伸を噛み締めながら、大きく背伸びをした。昨日、ぐっすり寝た筈なのにと首を傾げながら歩く。
学校からアパートは徒歩で１０分もかからないくらい近い。
「あっ…危ない！！」
「へっ…？」
声が聞こえた時には既に声の主とぶつかっていた。
「ごっごめん。大丈夫？君！？」

尻餅をついている僕に青年は手を差し伸べる。
「大丈夫。こっちこそ、余所見してて…ごめん」
差し出された手に掴まりながら僕は立ち上がった。
「ありがとう。え～…と、僕の顔に何かついてるかな？」
穴が開きそう程、青年は僕を見つめるていた。僕って自意識過剰だろうか？
「ごめん…昔の知人に似ていたから。俺、高柳正平。君は？」
歩きながら、青年もとい高柳君は僕に聞いてきた。
「僕？浅倉明日香」
「…一つ、浅倉君質問して良いかな？」
「良いけど？」
何質問されるか、身を構える僕に苦笑しながら高柳君は、大したことじゃないからと言った。
「正ちゃんって子に小さい頃、“結婚しよう”って言ったことある？」
「っ…！？」
正ちゃん…。確かに、そう呼んでいたような気がする。…何故、それを高柳君は知っている？
“正ちゃん”って子、俺なんだ」
ふわりと高柳君は笑う。
「嘘だ…。“正ちゃん”は僕より背も小さく身体って弱かったし、可愛かった」
「うん。身体弱かったし背も低かったよ。でも…可愛かったって言うのは聞き捨てならないけどね」
高柳君は苦笑する。
「じゃあ…何で、あの時男の子だっていってくれれば良かったのに」
「言ったら、結婚しようも…好きだって言ってくれなかっただろ？」
だとしても、騙されたと僕は思った。どう見ても、女のコだと思い込んじゃうくらい可愛かったし声だって、今みたいに低くなかったし…。

「俺は、ずっと…浅倉君が好きだ」
高柳君は笑いながら言った。
「はぁ…！？」

こうして、俺の初日は昔好きだった女のコじゃくて、男の子に告白された。しかも、高柳君とは同じクラスだ。頭の中は告白されたことでいっぱいだったため殆ど覚えていない。

「はぁ…学校面倒臭い」

一日目（後書き）

浅「いかがでしたか？」
高「えっ！？つまらない！？」
浅「（笑）」
高「いやいや、笑ったら本当みたいだから笑っちゃダメだよ（笑）」
浅「ごめん、ごめん（苦笑）」
高「もし、面白いまたは読んでやるよと言う優しい方また読んであげて欲しいかな」
浅「今日は、ここらで…浅倉と」
高「高柳でした」
浅＆ａｍｐ；高柳「バイバイ」

二日目（前書き）

会長（略会）「こんにちは、皆さん。×〇高校の会長を務めてます、尾坂直哉です。ほな、宜しく。恋人募集中！！」
若菜（略若）「……初めまして、若菜幸政です。会長、僕ら此処で勝手に自己紹介して良いのでしょうか？（苦笑）」
会「アレ…最後のスルー（汗）構わへんやろ（笑）だって、前書き愚痴話す場に変わってるやん（笑）」
若「面倒臭かったもので（苦笑）たっ…確かに、そうですね（苦笑）」

二日目

高校生活を始めて一週間が経つ。
「明日香、おはよう」
軽やかに僕に挨拶をしてきたのは、入学して早々モテまくりの高柳正平だ。
「…おはよう、正平」
そんな正平に告白された、主人公…浅倉明日香は眠たい目を擦りながら挨拶を返した。
「明日香は入りたい部活決まった」
「全くない」
「ダメだよ。どこでも良いから入らないと。オリエンテーションでも言ってたじゃないか」
正平は苦笑する。確かに、二日目に担任が言っていた気がする。
「面倒臭い…ふぁッ…はぁ…」
僕は欠伸なのか溜め息なのかわからないものを吐き出した。
「幽霊部員ってありかな？」
「ちょっ…君、アカンで！？」
後ろから見知らぬ声が聞こえたので振り向くと頭ひとつ分僕より背の高い、青年が居た。
ちなみに、僕の身長は平均よりやや低いが断じて低い部類に入るつもりはない。正平は、話し掛けてきた青年より少しだけ低いが、至って普通な位だ。羨ましい。
「入るからにはちゃんと、部活せぇへんとアカンわ！！」
「はぁ……」
「何や…曖昧な返事やなぁ…君ら、入りたい部活あるか？」
無いと言ったら、訛りのある先輩（？）に勧誘されるのだろうかと、明日香は思った。
「ないですけど…」

躊躇いがちにぼくが言うと、訛りのある先輩らしき人はニンマリと笑いながら、僕らの肩を掴む。
「俺の部に入らへん？」
「何の部活ですか？」
正平は、興味が湧いたのか先輩らしき人に質問をしていた。
「んー…生徒か…漫研やで」
嘘つけ。生徒会って言いそうになった癖に漫研って、誰も信じないぞ。漫研舐めんなよ。
「何時から生徒会は、あなたの部になったんですか？」
やる気のなさそうな口調で訛り先輩に言う。
「あっ…若菜、居ったんか？」
「今、来たらあなたが一年生に絡んでいたので」
「ほな、そうか」
さてと訛り先輩の腕が肩から外れたし、僕らは学校に行かなきゃねとそそくさに歩こうと正平の腕を掴み歩こうと歩もうとしたら訛り先輩に阻止された。
「君ら、生徒会入らへん？」
「…はぁ！？」
さっき、漫研って言っていってた癖に手の平返したのように訛り先輩は僕らを漫研出はなく“生徒会”に誘い出してきた。
「すみませんが、入学して未だ日が浅いので止めておきます」
「若菜も君らと同じ一年生やで。慣れたら楽やで」
「俺の場合は例外です」
あぁ…ダブりかと、僕は勝手に想像していると若菜とか言う青年が「ダブりではないので」と言った。
「どうする、明日香？」
正平は僕の耳に耳打ちをする。
「へっ…？何が？」
「生徒会入るかって事だけど？」
「ヤだよ。面倒臭い。正平は？」

苦笑しながら正平は言う。
「んー…入る気は元々ないし、明日香も入らなそうだし、止めとく」
ふーんと曖昧に返事を返した。
「あのなぁ…耳打ちは始めだけかいな。全部聞こえとるわ」
苦笑しながら訛り先輩は言う。
「だったら、話が早いです。入る気が全くないのですみませんが、諦めてくれますか？」
正平は、にこやかに言ってはいるが言ってる内容がはっきりと言い過ぎだろうと僕は思った。
「嫌やで。俺、諦め悪いねん。若菜も何か言ったり？」
「はぁ…。まぁ…会長の言葉を全部真に受けなくて良いから」
「はぁ…わかった。……会長って？」
「俺や」
ニンマリと訛り先輩は笑う。
嘘だろっと僕は、内心焦った。会長ってあの会長？いやいや、あんなんで会長はないだろうと考えていると、正平はこそっと僕に聞いてきた。
「まさか、知らないとか？」
「アハハ、知らないよ。入学式寝てたし」
「てっきり、明日香知ってるもんだと思ってた」
「いやいや、ぐっすり寝てたから何時、会長さんがお話をしていたかなんてどうでも良いし」
「はっきり言わんくてもええやん。俺の心傷付いてもた。俺の心が治るまで、生徒会に入れや」
「えっ！？嫌ですよ」
「アカン、入れ」
強迫まがいな口調で訛り先輩は言う。言い争っても、無駄っぽく見えてきたので僕らが折れた。

はぁ…学校行くのが嫌になりました。何故って？部活に入る気もなかったのに…生徒会に誘われるし、あぁ…面倒臭い。

「誰か、俺の代わりに学校行って？」

二日目（後書き）

浅「乗っ取られたのかと本気で思っちゃった（笑）」
高「考え過ぎだって（笑）」
会「そうやで。もっと気楽に考えたらええんやで」
浅「！？会長さんが何で此処に居るんですか（ビックリ）」
会「ええやん（笑）」
高「まぁ…ここらで、お開きと。俺高柳正平と」
浅「浅倉明日香と」
会「会長の事、尾坂直哉と」
若「若菜幸政が無駄な時間を使わせて頂きました」
高「さよなら」
浅「バイバイ」
会「さいなら」
若「ごきげんよう」
高＆ａｍｐ；会＆ａｍｐ；浅「！？」
若「驚かなくても良いじゃないですか（苦笑）」

三日目（前書き）

天井（略天）「初めまして、天井久史です。生徒会では、副会長を務めてます。まぁ…宜しく」
浅「天井先輩は、此処に来るのって初めてですよね？」
天「まぁ…な（苦笑）あいつ（会長）は何処に行ったか知ってるか？」
浅「わからないですね（苦笑）」
天「…だろうな（苦笑）」
浅「直哉先輩に何か用ですか？」
天「あぁ…大有りだ。書類が山のようにあるのに、尾坂のヤツ…（怒）」
浅「まぁ…見つけたら、直哉先輩に言っときます（苦笑）」
天「おっ！！ありがとうな（微笑）」

三日目

「はい、会長さん」
僕は雑用みたいに…雑用なんですけど、お茶を会長に配る。生徒会に強制的に入って三日目が過ぎようとしている。未だ、残りの生徒会メンバーに会っていない。何人で切り盛りしているんだろうと僕は思った。
「おおきに」
ニコッ笑いながら会長…名前何だっけ？大阪…？違うなぁ…違いはしないが、何かが違う。
「尾坂、またこんな所でサボってるのか？」
あっ…そうそう、尾坂直哉だ。強ち間違っちゃいないと一人勝手に僕は考えていた。
「んー…君は？」
「浅倉明日香君や。あと、若菜と一緒に書類見てるのが高柳正平君やで」
「まさか、尾坂が無理矢理入れたんじゃねぇのか？」
正解です。何でわかるんだと、僕は内心目の前に居る先輩らしき人を尊敬の眼差しで見つめた。
「ちゃうわ、アホ！！彼らが快く承諾したんや」心外やと怒り笑う会長を先輩らしき人は会長を無視して僕は見る。
「悪いな、俺は天井久史だ。一応、副会長だ。宜しく、浅倉君」
差し出された手を僕は握りながら、あぁ…この人が会長だったら駄々をこねずに来たかもと思った。
「宜しくお願いします、副会長」
「浅倉君、副会長は止めて欲しい」
「わかりました。天井先輩で良いですか？」
「ちょっ…浅倉君、何で俺の時は嫌やって言うたくせに天井はええんか？」

子供のように口を尖らせながら会長はいじけた。
「そうなのか？」天井先輩は苦笑しながら僕に問い掛ける。
「まぁ…はい」
「…あいつ、面倒臭いから名前で呼んでやってくれないか？」
「はぁ…わかりました」
僕は、会長もとい尾坂先輩の席に近付いた。
「あの…」
「何やねん。お茶のおかわりやったらいらんで」
椅子の上で三角座りをしながら顔を埋める。あぁ…面倒臭い。
「…尾坂先輩」
「直哉や。直哉って呼んで欲しいんや」
……ウゼ。じゃなくて、チラッと天井先輩を見ると声を抑えながら笑っている。他人事だからって、ちょっと天井先輩！？
チラチラと尾坂先輩は僕を見る。面倒臭い。その言葉が脳裏に浮かぶ。内心、溜め息を吐きたいのを我慢した。
「直哉先輩…で良いですか？」
「うん！！それがええええわ」
尾坂先輩もとい直哉先輩はさっきのウジウジしたオーラとは違い、直哉先輩は眩しいくらいの満面の笑みを浮かべる。
「おおきに、浅倉君」
ドサッと直哉先輩の机に書類を若菜君は溜め息を吐きながら置く。
「会長、遊んでないで書類確認したんで見直し捺印お願いします」
「わっわかった。お疲れちゃん、お二人さん。天井、生徒会に来たんなら手伝ってな」
「……俺、自分の分は随分前に済ませるよう言った筈だが？」
「いや…明日からって決めてたんやで」
直哉先輩は天井先輩の目を反らしながら頭を掻く。
「へぇ…明日。尾坂、今すぐやれ」
僕が直哉先輩の立場だったら、怖すぎる。天井先輩は青筋立てながら笑みを浮かべ、命令口調で言う。

「うっ…はい」
怖っ。何て言ったら、自分にも振り掛かりそうなので敢えて言わない。僕は、空を見ていると天井先輩と目があった。
「浅倉君、どうした？」
「いえ、何でもないです」
言えるわけないでしょ。あなたが怖すぎですなんて。
「そうかぁ…？」
天井先輩は、苦笑しながら大量の書類に目を通している。
それにしても、僕って生徒会に必要か？何かできるかって言われても、大して何もないし…パソコンだってインターネットで調べることは出来ても、その他の訳のわからない何か…こうブラインドタッチ何て出来ないし、人差し指でポチポチ押すのがいっぱいいっぱいだ。
更に、勉強なんて好きじゃない。人並みだ。
正平は、勉強や運動が得意でしかも面も良い。更に、性格はすこぶる良い。
何で僕なんかを好きなのだろうか？
昔の約束に縛られているのだろうか？
……わからない。
「疲れた、明日香？」
正平は、僕の顔を覗き込む。僕は、首を横に振った。疲れるんだったら、正平の方じゃないのか？
僕は、お茶を淹れただけだ。
「そんなことないよ。正平は…？」
「俺は、平気だよ。ただ、明日香が辛そうな顔をしてたから」
苦笑しながら正平は言う。
「会長の相手してりゃあ…そういう面にもなりたくなるよな」
書類を片手に若菜君は言う。
「ちょっ…若菜！？敬えや」
直哉先輩は苦笑しながらも目は書類だ。

「喋ってないで、書類」
ピシャリと天井先輩は言う。
「へいへい」

これが、生徒会の一日の流れだ。殆ど僕は椅子に座ってお菓子を食べたり、たまに直哉先輩にお茶を淹れたり若菜君達にも淹れる。
他の生徒会のメンバーが居るのか聞きたいけど、まぁいっか。どうせ、嫌でも会えるだろうし。

三日目（後書き）

会「ここまで逃げれば大丈夫やろう（汗）」
高「…何が大丈夫なんです？」
会「！？ビックリしたわ（汗）」
高「すみません（苦笑）…まさか、天井先輩からですか？」
会「まさかも糞もあるかいな。天井から逃げてんねん」
高「へぇ…（苦笑）」
会「アイツ、メッチャ怖いんやで。少し、休憩しただけですぐ怒るし」
天「怒らせる様なことをしなきゃ良いだろ？（怒）」
高「あっ…明日香と約束があったんで（逃げ）」
会「ちょっ…（汗）逃げんなや！！」
天「逃げてんのはあんただろうが！！（怒）」
会「うっ…すまんせんでした！！」

四日目（前書き）

沖田（略沖）「初めて、沖田啓史です。まぁ…宜しくお願いします」
浅「転校生って在り来たりだよね（笑）」
沖「確かに（笑）って俺、否定！？」
浅「ごめん、ごめん（笑）」
若「（苦笑）」
浅「何か此処って話すだけなら、お菓子持ってきて良い？」
高「明日香…（苦笑）まぁ…良いんじゃない？」
若「いやいや…（笑）良いのかなぁ…どう思う、沖田君？」
沖「良いと思うぜ（笑）丁度、俺も考えてたんだ。喉渇いたなぁって（笑）」
浅「お待たせ（袋に入っているお菓子とジュースを持ってきた）」
沖「おっ！！気が利くね、浅倉君」
高「重たくないか、明日香？一つ持とうか？」
浅「じゃあ、お菓子適当に分けて貰って良いか？」
高「わかった」
若「取りあえず、長くなりそうなので後書きに続く！！」

四日目

あぁ…何で転校なんて。

美味しそうな“ネタ”が散らばっていたのに。

はぁ……一から見つけるか。

……

生徒会に入って一ヶ月が過ぎようとしていた。

「あのさぁ、正平」

あぁ…身長が平均より低いのが悔しい。だって、首が痛くなるからだ。

「何かな、明日香？」
正平は下駄箱を開けながら僕の方をニコッと笑う。
「転校生来るって、直哉先輩が言ってけど…」
僕は、話を中断した。目の前にいる、正平の顔が段々辛そうに歪む。
「……」
「……教室行こっか？」
「うん…ごめん」
何のごめんだろうか？僕は、正平に謝られるようなことされてもなければ言われてもない。
「…正平」
「何かな？」重たい空気が僕らの周りを漂う。しかも、正平のオーラからも“話し掛けるな”って雰囲気も出すし……何か、疲れた。
「何でもない」
教室のドアを開けながら僕は言った。
「そう…？」
正平は“話し掛けるな”オーラを出しながらも、僕の“何でもない”の言葉に落ち込むし。はっきり言ってくれないとわからん。言いたいことがあるんだったら言ってくれてもいいのにと僕は思った。
正平が教室に入るなり、女子達が正平の机の周りを囲むように集まる。
あぁ…一度でも良いから僕もあんな風に女のコに囲まれてみたい。
「浅倉君、放課後生徒会に集合と会長から命令」
若菜君とは同じクラスだったことに気付いたのは生徒会に入った後だ。
「あっありがとう、若菜君」
「面倒臭くないか？…浅倉君」
アハハ、面倒臭いなんて言えるわけないだろ。
「はっきり言って、面倒臭いなんて…言えないよ」
「言ってるし」
若菜君は苦笑しながら言う。

「本当！？つい、僕が行く意味ってあんのかなぁ？」
「さぁ…な。でも、会長はお二人さんを気にってるし。それに、二人が来ると会長よく働く」
最後のは本音だろとツッコミを入れたくなった。
「俺らのクラスに転校生来るらしい」
「あっ…それ、直哉先輩の戯れ言だと思ってた」
通りで僕の隣に空席があるのか。
「酷っ！！」
若菜君は苦笑しながら、僕の言葉に否定はしなかった。
「おーい、席につけ。ふぁッ…あぁ…」
若菜君以上にやる気がないのは九条涼先生だ。九条先生は生徒から人気がある。特に女子に。何故かって？…顔が良いからだ。
授業中下ネタを平気で言うし、小テストの時は週刊誌を読んだりゲームをしたり…良いとこ殆どないが、どこか引かれるのがあるのだろう。まぁ…僕は、苦手だけどね。未だ、直哉先輩の方がましかもしれない。
「あぁ…知ってるかもしれないが、転校生が今来ている。ふぁッ…眠たい。沖田君中へ入ってちょうだい」
真面目にやれと言いたいが、はぁーと僕は溜め息を吐いた。
「…はい」
ガラガラとドアを開ける。
周りの空気がざわつき始める。それは、転校生が…言いにくいが見た目が“オタク”っぽいからだ。前髪が伸びっぱなしだしで、オマケに瓶底眼鏡。
「え～…と、取りあえず自己紹介して貰っても良いかな？」
「…はい。沖田啓史です。宜しくお願いします」
ボソボソ話すのかと思いきや、適当にありきたりな台詞を沖田君はつまらなそうに自己紹介をする。
取りあえず軽く周りに沖田君は会釈して九条先生を見る。
「もう良いのか？」

「はい」
「そうか。なら、浅倉の…空いている席に座ってくれ」
「…はい」
沖田君は床に置いてある鞄を持ち、僕の隣の席まで歩いてくる。その際、クラスの連中は一人を除いて、珍しいものを見るように歩いている沖田君興味津々と眺める。
正平は、机の木目をぼんやりと見ているようだ。まるで、正平だけが孤立しているみたいだ。
「浅倉…聞いているか？」
近い。まぁ…九条先生の顔が間近にあったらそりゃあ、ビックリするぜ。
「はっ…へっ…！？」
自分で言うのもアレだが、情けないなぁって思った。取りあえず、気持ちを変えて九条先生をみる。
「何ですか？」
「隣の沖田君の世話係は君に任せた。先生さぁ…道案内とか面倒…忙しいから任せた」
面倒臭いっ言いそうになっただろう！？忙しいを理由に。
「わかりました。沖田君、宜しくね」
「…宜しく。教科書未だ、貰ってないから見せて貰って良いか？」
「良いよ」
「ありがとう」
のれんのように垂れ下がった髪のしたではどんな面をしているのか興味を僕が湧いたが「顔見せて」何て言ったら、失礼だし…今度言えば良いかと僕は思った。
「若菜君」
若菜君は僕の後ろだ。
「わかってる。会長には、後から来るって行っとくよ」
「いやいや、行かないって言ってよ」
「そりゃあ…行ってやりたいが、高柳君も浅倉君も来ないと会長仕

事しないからなぁ」
「浅倉君は生徒会なのか？」
「まぁ…成り行きでね」
「…成り行き」
本当の事言えるわけないだろ。無理矢理誘われたなんて。
「放課後、学校案内って事で」
「わかった。浅倉君。ひとつ聞いて良いか？」何を聞かれるのだろうと、僕は内心首を傾げたが、うんと頷いた。
「前列の女子に囲まれている青年、凄いな」
あぁ…正平か。
「そうだね。彼は、高柳正平君。彼もまた、生徒会のメンバーなんだ」
「そう言えば、今日は高柳君は浅倉君と一緒じゃないのか？」
「…一緒？（萌だな）」
「んー…喧嘩と言うか何と言うか」
僕は曖昧に答えた。正直、何と言えば良いのかわからなかった。喧嘩をしているわけでもないが、正平に話し掛けづらい。
「話してかけてみたらどうだ？（絡み、絡み、絡み）」
沖田君は、簡単に言うけど“話し掛けるな”オーラを出している相手にどうやって話し掛けりゃあ良いんだよ。
「どっちが悪いんだ？」
若菜君は自分の席から離れ、僕の席の前に勝手に座りながら話し掛ける。まぁ…前の席の人が居ないんだから勝手に座っても良いよな。どっちって聞かれても、多分僕が悪いような気がする。
「…僕かも」
「成る程…謝れば（浮気か？今のところ高柳×浅倉か？）」
いやいや、謝るって簡単に言うけど…。
あっ…正平と今目があったような気がする。何で、そんな辛そうな顔をしてるんだよ。正平は、席から離れた。
「しょ…正平」

「……」
正平は無言のまま教室を後にした。僕が…何をしたんだよ。気付いたときには僕は、正平の後を追っていた。
「まっ、待って。正平！！」
僕は、正平の腕を咄嗟に掴んでいた。
「……何かな？」
正平はニコリと笑う。“離せ”と僕は空気感が伝わる。
「僕が…何かしたんだったら謝る。…ゴメン」
「違う…。俺が勝手に……ゴメン」
「…教室に戻ろっか？」
「トイレに行ってくるから、先戻って？」
「わかった」
取りあえず正平と、仲直り出来たのかな？
「お帰り、浅倉君」
若菜君は手を軽く振りながら僕を手招きする。
「ただいま」
「その顔だと、仲直りしたのか、浅倉君？（よし、これでイチャ付いてくれたら）」
ニコリと沖田君は笑うが口元しか見えない。
「まぁ…ね」

自分では、気づいていなかったが顔に出やすいのだろうと思った。
それにしても、放課後、生徒会に行くのと沖田君の学校案内どっちがマシだろうか？…まぁ、学校案内の方がマシかもしれない。
兎に角、正平と仲直り出来ただけマシか。はぁ…面倒臭い。

四日目（後書き）

高「一部、音声が不愉快な場合がありますので気をつけて下さいね（笑）」
浅「何この変な説明（笑）意味わからん（モグモグ）」
若「さぁ…な（バリバリ）」
沖「作者の気遣いとか？（笑）それはないか（ゴクゴク）」
高「多分さぁ…（）内の音の事じゃないなか（笑）」
浅「成る程…って、僕が狙ってたヤツ食うなよ」
若「悪い、悪い（笑）これも、美味いぞ」
浅「本当！？（パク）本当だ！！（パクパク）」
高「収集つかなそうだな（苦笑）」
沖「確かに（笑）勝手に終わらさせて良いのか？」
高「さぁ…な（苦笑）まぁ…良いんじゃないのか？」
沖「それじゃあ、沖田啓史と若菜…何だっけ？」
高柳「若菜…確か、若菜…若菜幸政だったような気がする（笑）」
沖「ありがとうな、高柳君。改めまして、俺沖田啓史と若菜幸政と」
高「高柳正平と浅倉明日香でした」

五日目（前書き）

美浜（略美）「初めて、書記の美浜緑よ。宜しくね（ニコッ）」
会「おっ！！美浜、此処に来るの初めてやろ？」
美「そうねぇ…。初めてかしら。ふぅ…此処って何をするの？」
会「話やで。コミュニケーションやコミュニケーション（笑）」
美「へぇ…楽しそうじゃない。彼らも呼んだらいかがかしら？」
会「そうやな。二人より大勢の方が楽しいもんな（はにかむ）」
美「ええ（ニコッ）」

五日目

放課後は、嫌でもやって来る。
「沖田君、そろそろ行こっか？」
「わかった」
「正平、先生徒会行ってて」
「うん、わかった」
僕らは鞄を手にとって、教室を後にした。

……

どうも、こんにちは。沖田君こと沖田啓史です。
×〇高校に転校して、今浅倉君に学校案内して貰っている。
俺は、彼らには言えない秘密がある。…知りたい？えっ！？興味ないって？まぁ…大した秘密でもないんで言っちゃいます。
俺、“腐男子”なんだ。小中と男子校で転校しなかったら、エスカレーター式で高校もそのまま上がっていたかも。
自分が腐男子だって気づいたのは、中学二年の時だった。じゃれあっている奴らを見て“萌”を感じてしまった。
まぁ…坂を降る石のように俺は、“萌”を堪能している。
敢えて言うが、腐男子ではあるが傍観者として野郎同士がイチャついてるのを見て楽しむだけで、自分は関わりたくない。…身勝手？すんません、事実なんで。

あぁ…見た目についてなんだけど、別にカツラでもなけりゃあオシャレで眼鏡をかけている訳ではない。本当に目が悪いのだ。コンタクトつければ良いと言うが、面倒臭いし痛いし面倒臭いし…大切なことなので二回言っとくね。
髪は切りに行くのが嫌なだけだ。
まぁ…顔が良いから、コスプ…変装している訳ではない。昔、ヤンチャなこと何てしてないしどこぞのヤンキーの総長何かしてない。寧ろ平々凡々な生活を送っていた。
それにしても、前髪が邪魔だなぁ。
「浅倉君、髪を束ねる何か持ってない？」
「んー…ちょっと待ってね」
浅倉君は制服のポケットに手を突っ込む。
浅倉君って受けだな。見た目も雰囲気も。相手は、高柳君か若菜君。もしくは、未だ会ったことのない会長。
「あった。輪ゴムで良いか？」
「おう！！ありがとう」
俺は、輪ゴムを受け取り前髪を束ねる。ふと、視線を感じると思ったら浅倉君が目を輝かせながら俺を見る。
「どうかしたか？」
「えっ！？あぁ…眼鏡って度入ってる？」
「まぁ…ね。かけてみるか？凄くキツいぜ」
そう言って、俺は眼鏡を外した。うわぁ…ボヤける。
「ありがとう。っ…視界が変だ。…ありがとう、返すね」
浅倉君はこめかみを押さえなから眼鏡を俺に渡した。
「…沖田君って眼鏡外すとカッコイイね。…勿体無い」
さらりと浅倉君は言う。
「お世辞言っても何も出ないぜ」
俺は、笑いながら言うと本当だってと浅倉君は強く言う。
「…無自覚」
「いやいや、俺普通だし」

笑いながら俺が言うと、イケメンは自分のこと普通って言って謙遜ばかりするのかと浅倉君は言う。
「何か…悪かった」
「いや、僕も何か熱くなっていた。…だいたい、案内したけどいきたい場所ってあるかな？」
「んー…ないかな。あっ…生徒会。行ってみたい（カオスかなぁ…。会長と誰かの絡み見てぇ！！）」
「良いけど…。はぁ…」
浅倉君は軽く溜め息をつく。生徒会室でナニかされてるのかな？だとしたら、美味しすぎる。
「そんなに楽しみか？…生徒会室。普通だよ」
物凄く顔に出ていたらしく、浅倉君は苦笑する。
「楽しみだぜ。…何て言うか、俺好奇心強い方だから会長さんどんな人か会ってみたくて（浅倉君と会長さんとの絡みでも良いけど、他の人との絡みも見たい。クラス以外の奴らとの）」
「へぇ…。ついたよ。あぁ…面倒臭い」
浅倉君は溜め息をまた吐いた。吐いた後に、三回ドアをノックして中に入った。…うん。大して、豪華でもなけぁあ派手ですらない。まぁ…質素としか言いようがない。
「遅いで。俺、めっちゃ寂しかったんや」
訛りのある先輩らしき人は浅倉君に抱きつく。
「はいはい。そんなことより、天井先輩に迷惑かけていないですか？」
浅倉君は手慣れた素振りで訛りのある先輩らしき人の背中を擦る。
「失敬な！？かけとらんわ！！んー…お宅誰や？」
「彼は、沖田啓史君です。生徒会に行きたいと言ったので一緒に連れてきたんです」
「宜しくお願いします」
俺は、ありきたりな台詞を言った。
「宜しゅうな。沖田君。取りあえず、君もこの書類に目通してくれ

へんか？」
「へっ…？」
俺は、するしない云々言う前に訛りのある先輩らしき人に書類を手渡された。2、3枚じゃない。5、6センチはありそうなくらい多い。
「僕、お茶淹れてきます」
「おおきに。冷蔵庫にプリンがあると思うんや。おやつに沖田君と一緒に食べ。沖田君、君は若菜達の机空いてるから使い」
「はぁ…」
曖昧に俺は、答えた後に若菜君がやる気のなさそうに手を振る。
「何時もこんな感じなのか？」
俺は、分厚い書類を机に置いた。
「まぁ…ね。慣れたら楽だと思うよ」
若菜君は笑いながら言うけど隣の高柳君は手を横に振った。
「いやいや、若菜君の言うことを間に受けたらダメだからな。無理だから」
そう言っている割には順調に枚数は減らしていっている。
「俺、生徒会室来たかっただけなのに」
「ドンマイ、沖田君。プリンでも食べて気を、我慢して？」
ニコッ笑いながら浅倉君はプリンとコーヒーを机に置く。
「そうやで。世の中、理不尽な事ばかりや。今のうちに慣れとき」
訛りのある先輩らしき人はコーヒーをすすりながら俺に言う。
「はぁ…それにしても、会長さんって未だ来てないのか？」
俺は、溜め息を吐きながら呟くと高柳君と若菜君は顔を見合わせ笑う。
「“会長さん”だったら、沖田君に書類渡した人が沖田君が会いたがっていた“会長さん”」
「嘘だろ！！もっとこう…会長らしい人が会長していると期待したのに…」
正直、残念だ。もっと、豪快な人とか物腰が柔らかそうな人が会長

かと期待したのに。
「ほぅ…。自分、会長が俺で悪かったなぁ」
にこやかに訛りのある先輩らしき人もとい会長の背後から何とも言えない威圧感があった。
「あの…その、言葉の綾と言うか何と言うか…」
俺は、その場を何とか取り次ごうと必死に言葉を探すが思うように浮かばない。
「わかっとるわ。…会長らしくないことも。天井の方が会長っぽいことも。でもなぁ…言うたらアカンことはあるわ！！罰として、その暑苦しい前髪切り！！」
えっ！？ちょっ…最後の言葉が本音だろと言いたかったが、俺自身言える立場ではないので渋々頷いた。
「あらあら、此処は会長の部屋にでもなったのかしら？」
高くはないが低くもない“男性”の声が聞こえた。
見た目は女子より女子みたいなくらい綺麗だ。まとう雰囲気や容姿全てが完璧だ。だか、残念なことに制服は男子用の学ランだ。まぁ…似合ってますけどね。
「美浜。久しぶりやないか。今まで何処に居ったんや？」
「お久しぶりね…会長。今日はね、あなたのお気に入りに会いに来たのよ」
美浜と会長は言っていたような…。美浜先輩は優雅に腰を下ろす。
「…コーヒーと紅茶どちらが良いですか？」
浅倉君はお盆を両手に持ちながら美浜先輩に聞く。
「そうねぇ…コーヒー頂こうかしら」
「わかりました」
あぁ…今ので、俺の中の腐男子君が叫ぶ。美浜×浅倉ありだ！！…って。
それにしても、減らないなぁ。…書類。
「沖田君」
若菜君は書類を片手に俺を呼ぶ。

「なに？」
「順調だね。俺の分もやる？」
冗談半分若菜君は言う。
「やらないよ。ただでさえ、生徒会のメンバーですらない俺がやってるのに」
苦笑しながら、俺は若菜君に言うと高柳君も若菜君と一緒なことを考えていたのか知らないが、手を止めて俺を見る。
「…残念」
ニコッと笑いながら高柳君は言う。仮に俺が女子だったら落ちたね。うん、そのくらい威力の強い笑顔だった。
「作業中、堪忍やけど沖田君ちょっとええか？」
「…はい。何でしょう？」
「そんなに固くならんくてええよ」
会長は笑いながら俺に言う。
「まぁ…前髪邪魔やさかい、美浜に切って貰い」
「…はい？」
まぁ…前髪邪魔やから切れと？いやいや、会長何言ってんの！？
「良いわよ。あら、本当長いわね」
何暢気に言ってんの、美浜先輩！？
「やろ？ほな美浜、宜しゅうな」
「わかったわ」
ニコッと美浜先輩は笑いながら俺に近づく。
「んー…切っちゃって良いかしら？」
「……お願いします」
「任せなさい」

こうして俺の前髪は美浜先輩によって短くされた。
まぁ…何時か切ろうと考えてたし無料……じゃなかった。うん、世の中タダより怖いものはない。何故か、俺は強制的に生徒会メンバーになってしまった。多分、髪を切って貰った時点で俺は気付くべきだった。
序でに、眼鏡もダサいという理由だけで新しい眼鏡を勝手頂いてしまった。
あぁ…丁重に断ったけど、買って貰っちゃった。
まぁ……ネ、ネタの為に頑張りますか！！

五日目（後書き）

浅「（直哉先輩に）呼ばれたのは良いけど、此処って僕らの場所じゃあ…」

高「しょうがないよ（苦笑）」

若菜「そうそう。それより、ハイチュー食うか？」

浅&沖「食べる！！」

浅「アレ…沖田君、さっぱりして…男前になっちゃって。…羨ましい（笑）生徒会メンバーに選ばれておめでとう（笑）」

沖「アハハ（笑）ありがとう（ニコッ）生徒会は嬉しくないけどね（苦笑）」

高「（苦笑）…似合ってるよ（ニコッ）」

沖「ありがとう（ニコッ）高柳君もカッコイイよ（いっそうこのまま浅倉君とイチャついてくれ）」

若「何か…時間が来たので若菜幸政と」

浅「浅倉明日香と」

高「高柳正平と」

沖「沖田啓史が…会「ちょっ…待ちぃ！！会長の沖田啓史と」

美「書記の美浜緑が伝えました。またね（ニコッ）」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2130u/

また、明日。

2011年10月8日01時20分発行